

地域の魅力発信による絆結び
—神谷の魅力をつなげ・ひろげる—

高橋ゼミナールⅢⅣ

4年

10M004	阿部亮太	10M007	伊藤健宏
10M008	上野晋矢	10M011	大沢健介
10M035	佐山奈津美	10M041	高橋達郎
10M052	早川祐也		

3年

11M012	太田愛実	11M021	國松優樹
11M024	古田島夏希	11M044	羽賀雄介
11M049	星田周哉	11M050	水品拓郎
11M063	大山真実		

目 次

1. はじめに
 1. 1 活動概要
 1. 2 神谷で活動する目的
2. 2012年度の活動
3. 2013年度地区行事への参加
 3. 1 神谷どろんこ田植え
 3. 2 運動会
 3. 3 神谷いかだづくり
 3. 4 いかだ進水式
 3. 5 秋季大祭
 3. 6 神谷地区収穫祭
4. 各班の活動報告
 4. 1 eコミ班
 - (1) eコミとは
 - (2) 目的
 - (3) コンセプト
 - (4) 反省点と今後の課題
 4. 2 チューリップ植栽
 - (1) 昨年わかったチューリップ発祥の地
 - (2) 今年の開花
 - (3) 今年の植栽活動
 - (4) 継続システムの重要性
 - (5) 成果・反省
 - (6) 来年以降に向けて
 4. 3 Eボート班（大沢）
 - (1) Eボートとは
 - (2) 目的
 - (3) 活動内容
 - (4) 成果・反省

5. まとめ

5. 1 活動を通しての成果・結果

5. 2 反省と改善すべき点

5. 3 神谷から吸収できたこと

謝辞

引用・参考文献

1. はじめに

1-1 活動概要

近年、少子高齢化や核家族化、若者の田舎離れなどの影響で、農山村地域が活性化を失いつつある。そのような中で、自分たちの生まれ育った地域の歴史や文化を守り、その伝統を次の世代に伝えるために、住民自らが立ち上がり地域の活性化に取り組んでいる地域が増えてきている。

私たち「高橋ゼミナール」では住民による地域活性化のための取り組みを「地域活性化プログラム」の活動の中で立ち上げ、平成21年度から活動を行ってきた。

具体的には、県や市などの地方自治体や国の手助けを待つのではなく、「自分たちの地域は自分たちで守っていく」という思いを一つにして、地域活性化に取り組んでいる長岡市神谷地区（旧越路町神谷地域）をモデルとして、地域に残された文化や歴史などの資産を守りながら地域の活性化を図る方策について取り組んできている。

2011年度の活動は、「地域の資産を生かした絆づくりー地域の魅力再発見ー」という課題で、「神谷情報マップ作り」と「歴史構造物を活用した活性化」と取り組んだ。2012年度は、2011年度の成果を更に発展させる目的で、「神谷の魅力発信による絆結びー神谷の魅力を知り・伝え・つなげるー」という課題で、①「神谷の詳しい魅力研究」、②「神谷の魅力を創り・引き出す」、③「神谷の魅力を他の場所へアピール」の3つのテーマに取り組んだ。2013年度は、2012年度の②と③のテーマを継続して取り組み、更に発展させることと、新たに地域の自然を生かした活性化策として、「Eボートによる須川川下り」に取り組んだ。

1-2 神谷で活動する目的

高橋ゼミでは、毎年活動で神谷に関わる活動を行ってきた。過去の先輩方の活動報告の資料などを見ていく中で、行ってきた活動の内容や神谷地区に関して興味を持ち、これまでの成果を更に発展させることを目指し、2012年度も神谷で活動を行うことにした。また、神谷では年間を通して多くの行事が行われており、そして私たちも参加させてもらうことにより神谷の方々と親交を深めることができ、多くの方々と積極的に接する機会が生まれ、コミュニケーション能力や目上の方に対しての接し方や言葉使いについて学ぶなど社会人基礎力を高めることができると考えた。

2. 2012年度の活動

2013年度の活動は、2012年度の活動をベースとして、それを更に発展させることとした。そこでここでは2012年度の活動の概要を紹介する。

2012年度は、活動内容に沿って三つの班に分かれて活動を実施してきた。作った班は以下のとおりである。

- ① 「神谷の詳しい魅力研究」
- ② 「神谷の魅力を創り引き出す」
- ③ 「神谷を他の場所へアピール」

「神谷の詳しい魅力研究」班は、2012年度に卒業した4年生が担当しており、神谷地区の無形資産や文献調査、ヒアリング調査を実施した。「神谷の魅力を創り引き出す」班は、神谷で行われる行事への参加、学生が計画したチューリップ植栽活動、チューリップをアピールする看板製作の活動を行った。「神谷を他の場所へアピール」班は、二つの班が行った活動を小冊子にまとめる活動やコミュニケーションツールを作成し、外部へ情報を発信して行く活動に取り組んだ。

●「神谷の詳しい魅力研究」班

「神谷地区の結束に良さと酒宴の関わり」と「新潟県におけるチューリップの先駆者・水島義郎氏の功績」の二つのテーマで活動を行った。既に述べた通り、この班は、2012年度に卒業した4年生だけで構成された班であった。したがって、活動報告は、2012年度の活動報告書で報告済みのため、ここでは省略した。

●「神谷の魅力を創り引き出す」班

4年生と一緒に活動した3年次の時の私たちは、神谷について詳しいことを知らなかった。そこで、神谷で毎年行われている行事に参加することによって神谷の人々と交流を深めることができるのではないかと考え、他の班のゼミ生と一緒に、次の5つの行事に参加した。

- ① 5月13日「どろんこ田田植え」
- ② 6月10日「神谷運動会」
- ③ 8月25日、26日「神谷神明社秋季大祭」
- ④ 9月16日「どろんこ田稲刈り」
- ⑤ 10月28日「収穫祭」

(1)どろんこ田田植え

毎年神谷で開催されている「どろんこ田田植え」に高橋ゼミナールとして初めて参加させてもらった。当日は神谷の小学生や親御さん、お年寄りの方など多くの人が参加し作業

を行った。現在の田植えは機械化が進み、昔の様な手法で田植えをすることはなくなったが、このどろんこ田の田植えでは、ゴロと呼ばれる昔ながらの道具を使い、手で植えた。ゴロとは六角形の形をしていて、田んぼの中を転がして十字の印を付けて行く道具である。その付けられた十字の場所に苗を植えて行くのであるが、手で植える時代の田植えには欠かせない道具であった。ゴロ押しが終わると小学生たちは早々と田んぼの中に入っていったが、私たちは気温の寒さと水の冷たさでなかなか田んぼに入ることができなかった。しかし、いざ入ってみると泥の中は、思ったよりも暖かく感じられた。泥に足を取られる人も多く、小学生の中には転んで泥だらけになってしまう子もいた。約2時間で作業は、終了した。苗が植えられた田んぼを見て達成感を感じることができた。



図 2 - 1

泥に足を取られながらも苗を植えるゼミ生

(2)運動会

毎年行われる神谷運動会は、神谷中央公園を使用して行われる。しかし今回は、あいにくの雨のために越路小学校の体育館を借りて行われた。当日は、神谷の大勢の方が参加しており、普段公民館などでは合うことのない若い方々の顔も多く拝見した。今後、若い方たち向けの新しい取り組みも行いたいと考えた。

競技では、ゼミのメンバーは、ほとんどの種目に参加した。「玉入れ」は、年齢を限定せず、子供からお年寄りまで様々な世代の方を混ぜた種目で、競争性もなく、楽しみながら参加することができて、我々はこの競技で何度も呼ばれて参加した。この運動会では、「ビールの早飲みリレー」という種目があったが、此れまで見たことの無いものであった。コースの真ん中辺の机の上に置かれた瓶ビールを早飲みするという競技であるが、神谷特有の競技ではないかと思う。最後にはフラフラになりながらもゴールする人や、みんなで「乾杯」と言ってから飲み始める組まであり、この競技を楽しみにして運動会に参加する人もいるのではないかと思った。子供たちには「パン食い競争」が人気であった。私たちは、パンを吊るす役をしたが、強く引っ張らないとたるんでしまう紐に少々苦戦した。最後の「バトンリレー」は、ここ一番の盛り上がりを見せた。競技が終わった後、参加者全員に豚汁が振る舞われ、私たちもご馳走になった。皆わきあいあいとした雰囲気で、地域の団結力を感じさせる行事だと思った。



図 2 - 2
「パン食い競争」を手伝うゼミ生

(3)神谷神明社秋季大祭

毎年 8 月の下旬に神谷の神社で開催させている「神谷神明社秋季大祭」の 2 日目に開催される「演芸カラオケ大会」に高橋ゼミナールとして参加させてもらうことになった。初めてのことであり、どんな出し物をやったら良いかの話し合いをゼミの時間に行ったが、なかなか決まらず、気付けば 7 月の中旬になっていた。祭り当日まで時間がなく、焦りを感じた。そこで以前にも踊った経験のある「よさこいソーラン節」をやろうという意見が出た。秋季大祭の中でもいままで「よさこいソーラン節」をやったことは無いし、ステージ上で演ずるにはちょうど良いということから「よさこいソーラン節」を披露することになった。しかし練習スケジュールをしっかりと組んでいなかったことから、揃って練習できたのはわずか数回で、祭り当日まで不安を抱えてしまうことになった。

秋祭り当日は、神谷地区の各班の 13 のチームが参加し、子供や大人によるダンスやオリジナル劇が披露された。私たちの順番はいちばん最後であったが、順番が近づくにつれて緊張感と焦りを感じ、ステージに上がる前から皆緊張してしまった。ステージ上立った 5 名は、最初に自己紹介を行なった後に踊りを披露した。しかし音響トラブルで曲が途中から始まってしまったり、練習不足のために踊りが揃うことはなく、最後までバラバラに踊ってしまい、見ている方々にとても不快な感じを与えてしまった。しかし神谷の方々は



図 2 - 3
発表前に自己紹介をするゼミ生



図 2 - 4
上手くいかないながらも頑張るゼミ生

優しい方が多く、踊り終えた私たちに温かい拍手を送って下さった。

全部の出し物を出し終えたのちに表彰式が行われた。最初に「頑張ったで賞」が表彰され、私たちがその賞をいただいた。このとき、翌年も出演させてもらい今年よりも更に良い物をやらなくてはならないと感じた。この日参加したのは5名であったが、翌年は新3年生を含めた全員で秋季大祭に参加し、ひとつでも上位の賞を獲得したいと思った。

(4)どろんこ田稲刈り

「どろんこ田稲刈り」とは、5月に行った「どろんこ田田植え」で植えた稲を収穫する催しである。この年の行事は雨の日が多かったが、当日は天候に恵まれ、子供達からお年寄りまで多くの方が参加されていた。私たちゼミ生も数人が参加した。黄金色に実った稲を、皆汗を流しながら張り切って刈っておられた。ゼミ生の中には、稲刈りは初めてだというのも居て、農家の方から刈り方の指導を受けた。

稲刈りが終わった後の「はざかけ(刈った稲を天日干しする作業)」は、大人の方が行い、その間子供達は疲れた様子で休憩していた。稲刈りから「はざかけ」までの作業が終わった後、参加者全員が集まっての慰労会が公民館で開催された。



図 2 - 5

稲刈り後参加者が揃っての記念撮影

(5)収穫祭

収穫祭は、その年の農作業の労苦をねぎらうとともに収穫の喜びを分かち合うために毎年行われている行事である。また、住民の交流を深める場にもなっており、毎年とても賑わっている。餅つきが行われたり、その餅を使ったお汁粉やお雑煮、トン汁、焼き鳥などが振る舞われたりして、子供から大人まで、楽しめる行事である。私たちもこの行事に参加させて頂いたことを感謝しつつ、楽しませていただいた。餅は神谷の方々と一緒に私たちが汗を流しながら収穫したもち米であり、とても美味しく感じた。

この年は、特に「旧神谷信用組合」の建物の新名称を決める投票が行われ、私たちは、投票の集計係を担当した。投票の結果、新名称は「^{しんゆうかん}神友館」に決定した。



図 2－6

餅つきを手伝うゼミ生

(6)班独自の神谷での活動

「魅力を創り引き出す」班の活動テーマは、話し合いの結果、当初は3つであった。しかし、途中で変更したテーマの他に当初の計画にはなかった活動も行った。

当初の案

- ① コンテナアート作成
- ② 神谷神明社秋季大祭への参加
- ③ チューリップ植栽活動

変更後の案

- ① 神谷神明社秋季大祭への参加
- ② ものづくり教室開催
- ③ チューリップ植栽活動
- ④ チューリップ看板作成

①コンテナアート作成

当初の活動テーマのひとつに、神谷の防災倉庫として使われているコンテナ車を使ったコンテナアート作成案を掲げていた。神谷の小学生が夏休みを使って、縦2、5m×横12mのコンテナ車に神谷の風景や漫画の登場人物を描くというものであった。しかし漫画の登場人物を描くには、作者の了解を得なければならないため、漫画を描くことは無理であると判断した。7月4日に、神谷公民館でコンテナアート作成について、区長さんとの話し合いを行った。区長さんから、コンテナアートは良い案であるが、問題点があり、実現は難しいのではないかとこの考えが示された。その理由は、次の3点である。

- ① コンテナが錆び付いていて、使うなら錆落としの作業が必要である。
- ② コンテナ車は神友館の後ろに設置されている。県道351号線沿いの遊園地に移動するには、業者に頼む必要があり、お金が発生してしまう。
- ③ 移動先の遊園地は、後に宅地として販売する計画があり、その時には撤去することになってしまう。



図 2-7

コンテナアートに使う予定だったコンテナ車



図 2-8

コンテナ車を設置する予定だった遊園地

この話し合いの結果、コンテナアート作成は廃案となった。代替案として、「パネルアート」を作成して公園の柵に飾るという案も提案したが、早急の材料費の見積もりやデザイン画の作成などが必要であり、開催日まで時間がない中では無理ということで、こちらの案も廃案となってしまった。

②ものづくり教室の開催

コンテナアート作成は、神谷の小学生たちを対象にした活動であったが、前述した理由で計画を変更せざるを得なかった。そこで、コンテナアートの代わりに小学生たちと一緒にできそうな企画をとということで「ものづくり教室」の開催を考えた。神谷には、趣味でほうき作りを行っている「神谷創作趣味の会」（以後、趣味の会と記す）の人たちが居ると言うことを聞き、会の代表でほうき作りにも詳しい永井久一さんに協力をお願いすることにした。

i) 永井久一さん（「神谷創作趣味の会」代表）へのヒアリング

永井さんに、神谷地区の小学生を対象とした「ものづくり教室」での「ほうき作り」への協力をお願いしたところ、興味を持っていただき、10月16日に神谷公民館にてヒアリングを行うことができた。ヒアリングでは、まず私たちの企画を説明し、なぜ小学生を対象にほうき作りを行うのかを聞いていただいた。その結果、参加者が集まったら引き受けてくださるとの約束をしていただくことができた。

更に今回のヒアリングでは、ほうき作りを開催するにあたり心配していたいくつかの疑問点も解消することができた。心配していた事柄は、つぎの通りである。

- ① 小学生でも作ることはできるか。
- ② 使用する材料や道具をどのように手配したらよいか。
- ③ 開催時期、開催場所の手配をどのようにしたらよいか。

これらの疑問点について、永井さんから、

- ① 簡略化したものであれば小学生でも簡単に自分だけのホウキを作ることができる。
- ② ホウキキビやホウキ作りに必要な作業台は永井さんの方で準備してもらえる。
- ③ 開催時期は収穫祭と重ならなければいつでも良い、また場所は神谷公民館の2階を使用できる。

というご返事をいただいた。

更に、趣味の会ではホウキ作りの他にもそば作りを行っているということが分かり、「ものづくり教室」開催時の昼食に手打ちそば作りを行ってもらえることになった。



図2-9

永井久一さんへのヒアリング



図2-10

「ものづくり教室」で作るほうきの試作品作り

ii) 日程と内容の検討

「ものづくり教室」を開催するにあたり、参加者の募集のチラシを作るために、開催日時を決めなくてはならなかった。10月16日のヒアリングの情報を基に2班のメンバーで話し合いを行ない、以下の様なスケジュール案を考えた。

「ものづくり教室」開催日時及び内容

日時：2012年11月4日（日）、11日（日）午前10時から午後15時程度

場所：神谷公民館

内容：小学生と一緒に神谷の伝統芸能であるホウキ作りと手打ちそば作り体験

しかし、小学生を対象とした企画であるが、この内容では参加者が集まらないだろうとの指摘を先生から受けて、内容を見直すこととなった。指摘された点は、考えている企画には子供を引き付ける何かが不足しているというものであった。そこでそば作りにちなんで、そば粉を使った何かしらのデザートづくりを考え、そば粉を使ったクッキーを作ることにした。試作の段階では、クッキーの生地が固まらないなど、従来のクッキー作りでは考えられないような苦勞をした。最初は上手く作ることではできなかったが、試作を繰り返

していく中で、水とのバランスやそば粉の配合などを調整してようやく作ることができた。

iii) チラシ作成

スケジュールが決定したことで次に取り掛かったのが、参加者募集のためのチラシ作成である。「ものづくり教室」開催の詳細を記した内容のチラシを作り、2週間に1回ある回覧板で各家庭に案内を配布させてもらい、チラシに添付した参加応募用紙を神谷公民館に設置した回収ポストで回収するという方法を取った。

急いでチラシを作成したために、デザインをしっかりと考えるという事ができなかった。その結果、参加応募者が1人も集まることはなかった。そこでデザインと内容をもう1度見直し、小学生が興味を持って読み、分かる内容に作り直した。

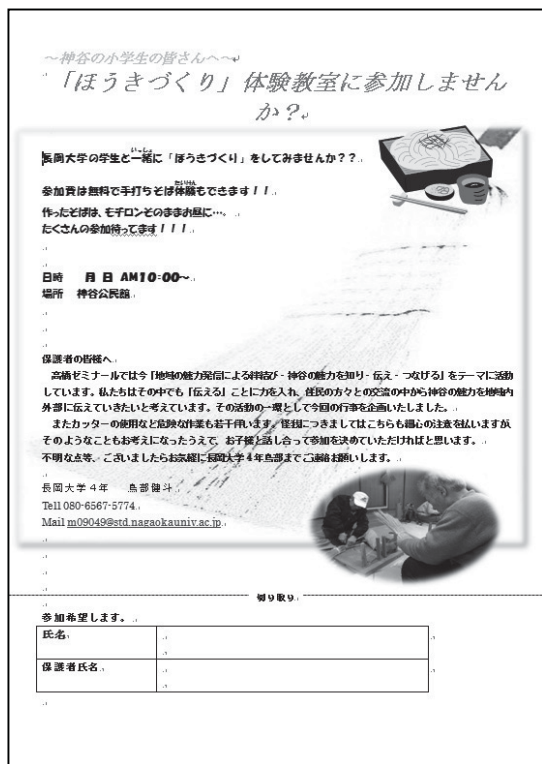


図 2 - 1 1

最初に作成したチラシ
(内容が難しく小学生向けではなかった)

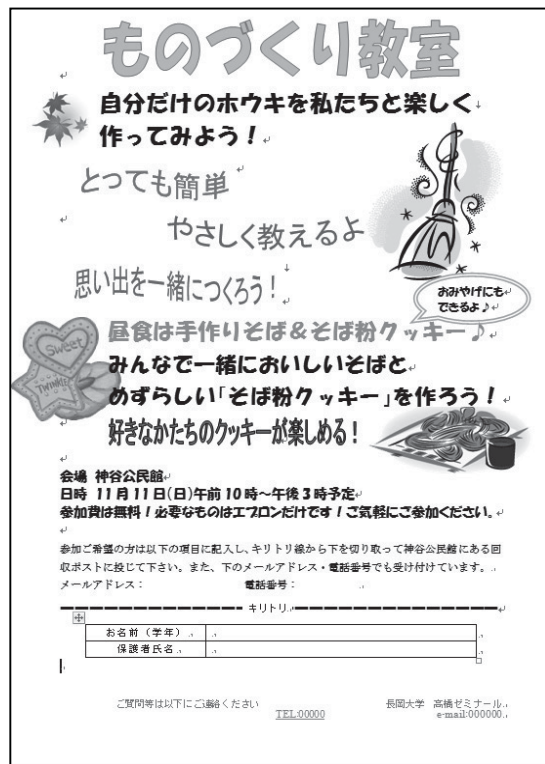


図 2 - 1 2

改善を行ない再び作成したチラシ
(興味を持ってもらえそうな内容、絵を入れ、文字も工夫した作りにした)

iv) 「ものづくり教室」開催

新たに作り直したチラシを使った広報活動の甲斐あって、今度は参加者が集まった。そこで、神谷創作趣味の会の永井久一さんに連絡を取り、11月11日に神谷公民館で「も

のづくり教室」を開催することとなった。

【そば作り】

ほうきづくりの前に、昼食で食べるそば打ちを行った。そば粉に水を加える工程から始まった。そば作りでは、粉に含ませる水の量が非常に大事である。水の配合が多かったり、少なかったりすると良い生地を作ることはできない。水を加えた後は、混ぜ、捏ねる作業である。力いっぱい生地を捏ねる作業など、力が必要となる作業は、ゼミ生の男性陣が担当した。その後、よく捏ねて出来上がった生地をローラーの付いた機械で何回か伸ばす。伸ばした生地は包丁でカットされ、ようやく普段私達が見かける生そばができあがった。そば作りも初めて行う人が多く、良い体験をさせてもらうことができた。



図 2 - 1 3

そば粉を練る作業の様子

【ほうき作り】

そば作りを体験した後、小学生の参加者2名と一緒にほうき作り教室を開催した。最初にほうき作りの説明をしていただき、その後ほうき作りを行った。参加した小学生が女の子であったため、力が必要になる作業では、ゼミ生も一緒になって作業している光景を見ることができた。分からない点については、趣味の会のメンバーの方に聞くなどして作業を進めた。最初はうまくいかない部分もあったが、作り方のコツを掴むと作業をスムーズ



図 2 - 1 4

ほうきの作り方を学ぶ様子



図 2 - 1 5

参加した小学生2名も真剣に作業中

に進めていくことができた。出来上がったほうきには、ゼミ生が用意した色とりどりの紐で飾りつけがされ、完成した。手作りということで、できあがった後には、達成感と喜びを感じることができた。今回の活動を通して、ハウキ作りの様に伝統工芸になりつつあるものを大切にしてもらい、少しでも興味を持ってくれたら良いなと思った。

【そば粉クッキー作り】

そば粉クッキー作りを担当したゼミ生は、クッキーの生地準備と参加してくださっている方々へのクッキー作りを午前中に行ない、ラッピング作業を行った。午後からは小学生と一緒に色々な抜型を使ってクッキーを作りながら楽しい時間を過ごした。クッキーは、事前に何回も試作品を作り、改良を行ったので、初めてそば粉クッキーを食べる小学生たちや大人の方々に喜んでもらうことができた。またお土産としてそば粉クッキーをあげた時の笑顔とお礼の言葉はとても嬉しかった。大変であったがやって良かったという気持ちになった。



図 2 - 1 6

クッキー作りの準備を行うゼミ生



図 2 - 1 7

小学生と一緒にクッキー作りを行う

③チューリップ植栽

i) 植栽活動に至るまで

2班の活動計画の中に神谷でチューリップ植栽活動を行いたいという話が出て、活動の中に取り入れた。文献調査を進めていく中で、神谷は新潟県のチューリップ発祥の地であるという事実を知った。しかし神谷住民の多くは、チューリップ発祥の地であるという事実を知らないでいた。そこで私たちは、神谷にチューリップを植え、咲かせることによって、神谷が新潟県のチューリップ発祥の地であるという事実を住民が認識し、地域の魅力として発信していけるのではないかと考えた。ただ、私たちだけでは、チューリップ植栽の知識が十分でないため、神谷の方々にも協力をしていただいて実行することにした。

チューリップの植栽活動の話し合いを5月下旬頃から開始し、計画は、早い時期から始めていた。しかし、途中、8月の秋季大祭への参加や11月の「ものづくり教室」開催な

どがあり、実際に活動を始めたのは、１０月下旬からになってしまった。そこで、２班のメンバー７名を２つの班に振り分け、ものづくり教室実行班とチューリップ植栽活動班に分かれて活動を行っていくことにした。

チューリップ植栽班は、まずチューリップの性質について調べた。球根の調査を進めていく中で、球根を植える時期が１０月から１２月までであるということで、早急に作業を行わなくてはならないということが分かった。そこで、１０月３０日に、植栽地の現地調査と神谷区長の白井湛さんへのヒアリング調査を行った。

ヒアリングでは、私たちが考えてきた植栽に関するアイデアを区長さんに聞いてもらう形になった。提案したアイデアは、神谷遊園地の一角を使った花壇作りと神友館の周りをプランターで囲むという二つの案である。またチューリップ植栽にかかる費用が大学側から出ないため、神谷の方から資金を出して頂けないかお願いすることになった。

区長さんは、私たちの願いを快く受け入れてくださり、植える場所についても許可が出た。但し、神谷遊園地は２０１３年以降売り地になる可能性があるが、それでも良ければと言われた。神谷遊園地は、国道３５１号線に面していて車の通りも多いことから、多くの人の目に付く場所であるため、どうしてもこの場所に植えたいと考えていた。

神谷遊園地が売り地になって花壇を移動しなければならない場合に備え、手軽に土を盛った花壇にすることにした。数日後、区長さんから、神谷遊園地に山土をトラックで運んでいただいた。また資金面も、後日見積もりを出して必要額約５万円を提示したところ、準備していただけることになり、チューリップ資金として４５、０００円いただいた。

実際にかかった費用は、次のとおりである。

チューリップ植栽費用

① 花壇植えチューリップ球根（単色タイプ）

１袋２５個入り@４９８円かける袋＝１、４９４円×５色分（黄、赤、紫、白、桃）
＝７、４７０円

② プランター植えのチューリップ球根（混合タイプ）

１袋２５個入り@５９８円×２５袋＝１４、９５０円

③ プランター腐葉土３０Ｌ @６９８円×１２袋＝８、３７６円

④ プランター @１９８円×２５個＝４、９５０円

⑤ 赤玉土１４Ｌ @２９８円×２袋＝５９６

合計金額 ３６、３４２円

残った８、６５８円は、チューリップ初開花の地を知らせる看板制作費として使用することにした。また、チューリップ花壇作りの際に急遽必要になったコンクリートブロック６０個分の費用は、神谷の有志の方から出していただいた。

ii) チューリップ花壇作成

11月4日に花壇作りを行った。当日は、神谷区長さんも参加して下さった。作業は、二班に分かれて行い、買い出し班は、区長さんからいただいたチューリップ資金を使って、プランターや腐葉土等、植栽に必要な物の買い出しに出かけた。残ったメンバーは、花壇作りのために運んで頂いた山土の塊を崩すことから作業を始めた。当日神谷遊園地で遊んでいた小学生3名も、花壇作りの活動に興味を持ったのか、一緒になって作業を行ってくれた。作成した花壇は、直径3m、高さ70cmの階段の様に盛り上げた3段構成にした。

しかしこの花壇は、その後に降った雨で崩れ、後日神谷へ行った時に無残な姿になっていた。そこで、ものづくり教室が行われた11月11日に急遽花壇を作り直すことにした。3段花壇は雨に耐えられないことから、今度は1段だけのシンプルな円形の花壇にした。更に、雨で土が崩れない様にブロックを2段に積みあげて周囲を囲んだ。

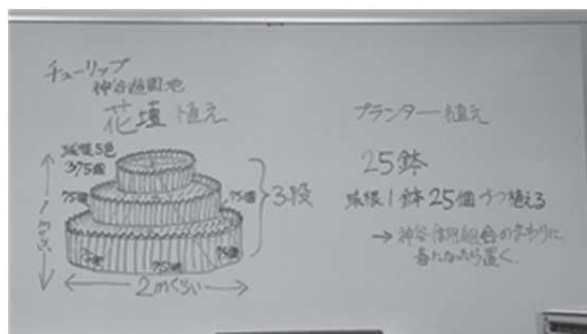


図2-18

当初計画した花壇のイラストデザイン



図2-19

小学生と花壇作りをするゼミ生

iii) 球根植栽の呼びかけ

チューリップの植栽活動はゼミ生だけでなく、神谷の方々にも参加してもらいたいと思い、呼びかけのチラシを作成し、神谷公民館をはじめ神谷地域内の数か所に貼らせてもらった。しかし、プランターに植栽を行った11日は、天候も余り良くなかったこともあって参加して下さる住民の方はなく、ゼミ生のみで球根を植える作業を行った。植えたプランターは神谷防災倉庫の下に置き、冬を越し春になったら出すことにした。



図2-20

プランターへの球根植栽の様子

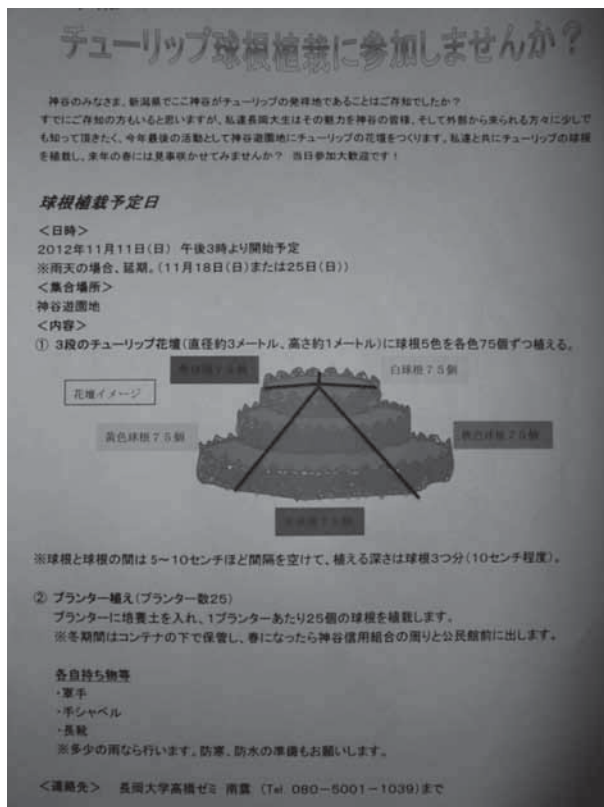


図 2 - 2 1
植栽の呼びかけに作成したチラシ

花壇に球根を植える作業は、11月20日の時間にゼミ生全員で神谷を訪れて行った。当日は雨が降っていて、花壇の土も水を多く含み泥のようになってしまっていた。そのため、当初考えていた理想的な植え方はできなかったが、375個の球根を無事植えることができた(このときの植え方が翌年春の開花に影響し、芽を出さなかった球根が多くあった)。このとき、神谷遊園地に居た小学生2名も一緒になって寒い中球根を植えてくれた。



図 2 - 2 2
雨の中での球根を植える作業

後日、チューリップ植栽活動の報告をするために、「神谷チューリップ植栽報告」と記したチラシを作成し、回覧板で周知させてもらった。チラシには、神谷が新潟県チューリップ初開花の地である由来、チューリップ活動を行っている写真、活動に関する謝辞を短く

まとめて、掲載した。

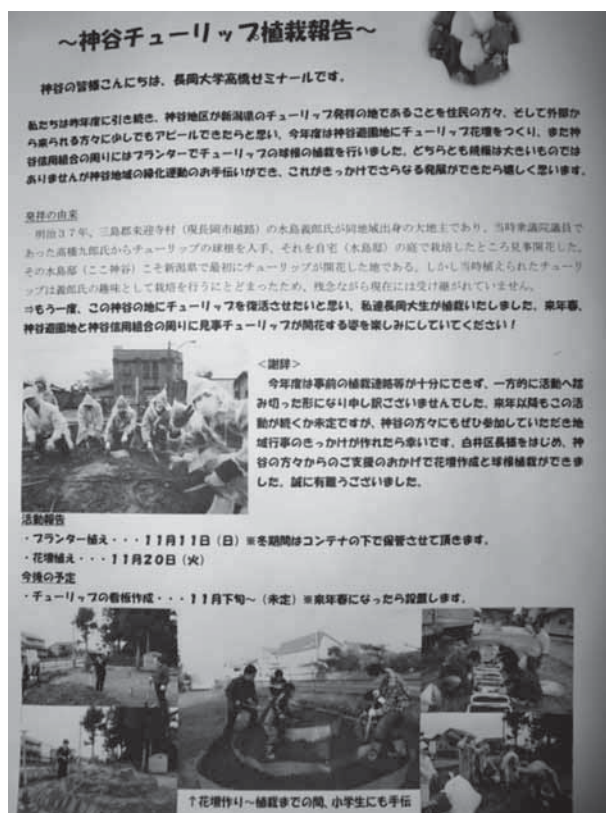


図 2-23

チューリップ植栽活動報告チラシ

iv) チューリップ看板作成

私たちはメンバーを分割し、神谷が新潟県初のチューリップ開花の地であることを目に見える形で外部に伝えることを目的として、チューリップの植栽と併せて看板を建てることにした。

チューリップ植栽資金として区長さんからいただいていたお金は、チューリップの植栽に要した費用を差し引いた約 8,000 円が残金として残った。そこで、この残金を使って、看板を作ることにした。板やペンキ等の価格を調べ、できるだけ予算内に収まるように努力した。その結果、縦 90cm、横 180cm、厚さ 1.2cm の板を使えば、ペンキやハケを購入した場合でも 8,000 円の予算内に収められることが分かった。その後、看板のデザインを決めるために、ゼミの時間の中で各自が案を出し合い、検討を重ねた。色塗りなどの看板作りの実際の作業は、神谷公民館で以下のように 3 回にわたって行った。

12月10日

- 1) ベニヤ板、角材、背景色ペンキ、ハケ、マスキングテープ等買い出し。
- 2) ベニヤ板の補強作業（角材を板の裏側に打ち付け）。
- 3) キャッチフレーズ「チューリップの里神谷」とチューリップのイラストをカーボン紙

で板に複写し、そこにマスキングテープを貼る。

4) ペイントローラーで背景色（ブラウン）を塗り、マスキングテープを剥がす。

1 2月17日

1) 「チューリップの里神谷」の文字輪郭を彫刻刀で彫る。

2) ペンキで文字とチューリップのイラストを塗る。

1 2月24日

1) 「～発祥の由来～」の一文をカーボン紙で複写。

2) カーボン紙で板に写った文字を白いマーカーでなぞる。（完成）。

制作した看板は、2013年1月1日の“賀詞交換会”の席上で神谷の方々に公開された。看板は、その後、設置するための加工が施され、雪が消えた2013年の春に神谷遊園地のチューリップ花壇の近くに建てられた。看板はチューリップが開花する4月～5月だけではなく、年間を通して設置されており、神谷地域の認知度向上に役立っている。



図2-23

看板に文字入れをする作業



図2-25

出来上がった看板

●「神谷を他の場所へアピール」班

(1) 冊子作りの目的・概要

① 冊子の目的・・・神谷の魅力を「伝える」

平成24年度は、活動のテーマに「神谷の魅力発信による絆結び—神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—」を決め、活動を行った。その中で、この班は神谷地区の魅力を多くの人に「伝える」ことを目的とした活動を行った。具体的には、神谷の魅力を多くの人に発信する手段として、冊子作りという方法を選んだ。

② なぜ冊子なのか？

情報発信の方法として冊子作りを選んだ理由は、以下の3つである。

◆神谷の方々の希望に応えるため

23年度の活動の中で作成した「神谷情報マップ」の評判が良く、「神谷情報マップ」を配布した後に行ったアンケート調査では、「神谷についてもっと詳しく知りたい」、「神谷マップの次号が欲しい」等々の意見が多く寄せられた。そこで、冊子の発行という形で、この要望に応えることにした。かつ

◆冊子の掲載情報の多さとその配布の際の利便性から

冊子にすることで、マップに比べ情報を多く載せることができ、紙面の都合で「神谷情報マップ」には載せることができなかった情報の補足と拡充ができる。さらに、冊子を道の駅などに置くことで、多くの人に見てもらえることができる。また、冊子を読んでいた人からまた別の人の手へと渡り回覧できる。その過程で、神谷地区の方々や長岡に住む方々に、より多くの神谷の魅力や歴史を伝えることができる。

◆前年のマップ作りの実績とノウハウを活かせる

23年度に行った「神谷情報マップ作り」で蓄積した知識や経験を活かすことができ、効率的な活動を行うことができる。また、これまでの活動で得た知識やノウハウをゼミの後輩に伝えて行くことができる。

(2) 冊子作りの経緯と活動内容

冊子作りの発案当初の計画から完成に至るまでの主な流れを示す。

6月時点

冊子の作成は決定していたが、掲載内容は未定であった。掲載内容について、グループ内や他グループとの話し合いをおこなった。

↓

7月から8月にかけて

冊子作成の目的の再確認と、掲載内容についての討議を行った。さらに、活動計画の策定や費用についての検討を行った。

↓

10月上旬

掲載内容の候補を「高橋九郎氏」、「水島義郎氏」、「チューリップ植栽」、「秋季大祭への参加」、「ハウキ作り」、「ネット地図」、「神谷の伝統芸能」に絞り込んだ。

↓

10月16日

10月15日に行われた中間レビューで出された意見を参考にして、いくつかの記載内容に対して再検討を行った。また、冊子の内容が、全体的に高橋ゼミナールの活動報告書

のような印象を受けるので見直した方が良いという意見を受けて、その点についての内容の見直しも行った。

↓

11月 一回目の企画書の提出

10月16日の再検討の結果を基にして、中間レビューで指摘されたいくつかの改善点や問題点について修正を行った。

この時点でまとまった冊子の企画内容は、以下のとおりである。

◆書式

フォント：MS Pゴシック

フォントサイズ

通常：10, 5pt

小見出し：14pt

大見出し：16pt

用紙サイズ：A4

字数：40字×40字

◆構成

～タイトル

～目次

1. はじめに

- ・小冊子の趣旨
- ・神谷の概要

2. 神谷について

- ・高橋九郎氏
- ・神谷とお酒の関係

3. チューリップ特集

- ・水島義郎
- ・チューリップ植栽

4. 行事

- ・どろんこ田植え
- ・収穫祭
- ・秋季大祭
- ・ホウキ作り
- ・行事一覧

5. ネット地図

- ・システム
- ・コミュニケーションツール

6. 参考文献



1 2 月 二回目の企画書の作成・提出

一回目の企画書で指摘された点を改善し、冊子もこの内容で冊子を作成することを決定
改善した点は以下のとおりである。

◆改善点

- ・フォントサイズの変更（以前に比べて大きくした）
- ・冊子のサイズをA 4 からB 5 へ縮小
- ・内容の重複部分の改善と見直し
- ・冊子の読者ターゲットの再確認
- ・タイトル修正
- ・項目 5 の変更
- ・冊子の締め括りとなる「まとめ」の導入
- ・文章を「です、ます」で統一
- ・読む人に神谷の魅力が伝えられるような内容にする

◆改善後の書式

フォント：MS P ゴシック

フォントサイズ

通常：1 2 p t

小見出し：1 6 p t

大見出し：1 8 p t

用紙サイズ：B 5

文字数：3 0 字×3 0 字

◆改善後の構成

タイトル：神谷の魅力との出会い～神谷の魅力を知り・伝え・つなげる

目次

1. はじめに

2. 神谷ってどんなところ

- ・高橋九郎氏
- ・神谷地域の住民の方々

3. 特集 チューリップ秘話～新潟県初の試験栽培の地 神谷

- ・水島義郎氏
- ・高橋ゼミのチューリップ植栽活動

4. 行ってみました神谷地区

- ・どろんこ田～田植えから収穫祭まで
- ・神谷秋季大祭
- ・ハウキプロジェクト
- ・神谷地区行事一覧
- ・神友館 命名決定

5. eコミュニティ・プラットフォームで神谷をご紹介

- ・システム

6. あとがき

- ・まとめ



1月 原稿の回収と編集

各人が担当した原稿を回収し、編集した。

(3) 冊子の項目について

①なぜこの項目になったか

冊子の項目を前述のように設定した理由は、この冊子を読む人に神谷の魅力を伝えることを念頭に置いたためである。そのため、神谷地区とはどのような所かということから始めて、神谷の魅力的な歴史や行事までを紹介する内容とした。

②各項目の説明

◆ 1. はじめに

「はじめに」では、当冊子の趣旨について簡単に説明する。

◆ 2. 神谷ってどんなところ？

この章は、「神谷の偉人 高橋九郎氏」と「今の神谷のすごい所」という二つの項目で構成する。「神谷の偉人 高橋九郎氏」では、神谷の大地主であり衆議院議員でもあった高橋九郎氏の神谷信用組合の設立時の貢献や暗渠排水工事等での功績について触れ、神谷地区への貢献が現在の神谷とどのように関係しているのかを紹介する。次の「今の神谷のすごいところ」では、今の神谷地区の方々と交流を持つ中で“すごい”と感じたこと、私たちの視点から見てここは神谷の魅力だと思えたことについて記載し、この記事を読んだ方から神谷に興味を持っていただくことを目指した。また、この冊子を読んだ神谷の方々からも、自分達の地域の魅力を再確認していただくことを目指した。

◆ 3. 特集 チューリップ秘話

「水島義郎氏の功績」と「高橋ゼミナールのチューリップ植栽活動」の2項目で構成する。「水島義郎氏の功績」では、今や県花となったチューリップを県内で最初に開花させた地は神谷であり、その栽培者こそが水島義郎氏であったという知られざる歴史について紹介する。「高橋ゼミナールのチューリップ植栽活動」の項では、その事実をもとに高橋ゼミナールが平成24年度に神谷地区で行ったチューリップ植栽と看板作りについて記述する。

◆ 4. 行ってみました神谷地区

私たち高橋ゼミナールが神谷の行事やイベントに参加した際の感想や、その時の楽しかった思い出などを「どろんこ田～田植えから収穫祭まで～」、「秋季大祭」、「ホウキプロジェクト」で述べる。また、「神谷地区 行事一覧」を載せることで、この冊子を読んだ人が実際に神谷に出かけて行事に参加するのを助ける。また、神谷地区の出来事として、旧神谷信用組合の建物が「神友館」と名付けられたことを知らせる「神友館 命名決定」の5つの項目で構成する。

◆ 5. eコミュニティ・プラットフォームで神谷をご紹介

現在、高橋ゼミナールがインターネット上で行っている神谷地区の情報発信で使用する“eコミュニティ・プラットフォーム (<http://ngok-u.net/group.php?gid=10011>)”について、「システム」の項で説明する。また、URLを記載し、興味のある方がインターネット上で検索しやすくする。

◆ 6. あとがき

この冊子の締め括りとなる文章と謝辞、参考文献を記述する

(4) 冊子の配布

試作のため少数発行とした。配布先は、回覧板での神谷地区での回覧、神谷公民館、ゼミナール内の三か所とした。

（５）他グループの活動への参加、取材

冊子作成班は、他の班の活動に積極的に参加した。第一の理由は、他の班の活動の進捗状況を把握するためであったが、それ以上に大きな理由は、自身も参加するで、他の班の活動への理解を深め、最善の形で内容の編集を行い、読者にわかりやすい内容にするためであった。

参加した活動

５月１９日	どろんこ田での田植え 神谷での高橋ゼミナールの活動報告会
６月１０日	神谷運動会
８月２５日・２６日	神谷秋季大祭
１１月４日	チューリップの花壇造り
１１月１１日	ハウキ作り チューリッププランター準備 花壇造り
１１月２０日	チューリップの球根植栽
１２月１０日	チューリップの看板造り
１２月２４日	チューリップの看板造り（２回目）

3. 2013度地区行事への参加

今年度は下記5つの神谷の行事に参加した。実際に神谷の皆さんと触れ合うことが出来る行事であり、各行事を通じて神谷の魅力を再発見することができて、多くのことを学ぶことができた。参加した行事は、以下の通りである。

- ① 5月12日「どろんこ田植え」
- ② 6月9日「運動会」
- ③ 7月28日「いかだづくり」
- ④ 8月4日「進水式」
- ⑤ 8月25日「秋季大祭」
- ⑥ 10月26日「収穫祭」

(1) 神谷どろんこ田植え

5月12日にどろんこ田の田植えが行われ、私たち高橋ゼミも参加をして。この行事は、毎年田植えの季節に神谷の子供から大人までがまっさらな泥の中に足を浸して、神谷に伝わる昔ながらの田植えを継承してゆこうという趣旨で催されている行事である。

当日は、幸い天気にも恵まれ、神谷の子供たち、大人の方々、私たち高橋ゼミらたくさんの方が集まった。神谷のみなさんと一緒に寒さの残る泥の中に入り、手に持った苗を一つ一つ腰を曲げながら丁寧に植えていった。途中、足を取られ泥の中へころびそうになったりして、なかなか神谷の方々のようにうまく植えられなかった。しかし、普段は会えない神谷の方々や仲間と話をしたりして、楽しみながら田植えを行った。田植えを終えた後の“大勢の人と一つのことを成し遂げた”という感動は、とても良い経験になった。

田植えの後は慰労会があり、神谷の方々と酒を飲みながら話をした。この日に初めて会ったとは思えぬほどすぐに受け入れてくださり、意見や雑談をしながら酒を酌み交わし、飲コミュニケーションを体験した。その場で新しいゼミのメンバー紹介や今後の活動計画を話し、意見や雑談を交えることで、なるべく神谷の方々の希望に添えるように今後の方針を固めることもできた。



図3-1
指導していながら苗を植えている様子

(2) 運動会

神谷運動会とは、毎年神谷地区の子供からおじいちゃんおばあちゃんまでが集まり、体を動かすイベントである。ただ集まるだけでなく、運動会の名の通り、たくさんの競技が用意されており、参加者全員が楽しめる内容になっている。例えばやっと歩けるようになった子供たちには風船とり競争、年代ごとのパン食い競争等がある。

神谷は16の班に分かれているが、その班対抗の玉入れが行われる。なかなか顔を合わせられない大人たちもこの日ばかりはこぞって参加し、普段なかなか話すことのないご近所さんと交流を深め、班の絆を強めている。

今年は6月に行われたが、学生3人が参加させていただいた。人手が足りない競技の人数合わせのためにほとんどの競技に参加し、神谷の皆さんと直接話を交わすことができた。

■学生が参加した種目、注目種目

① ビール早飲み

神谷の特徴といえるビール早飲みは若い人だけでなくおじいちゃんおばあちゃんまでもが参加する。女の子だから、お年寄りだからといった特別視は一切なく、瓶ビールを一本あけさせる。もちろん飲みきるまでは次のレースに進まず、最後まで飲み切る。参加学生もふらふらになりながら多くの方の声援をもらい、ビリながらもゴールすることができた。



図3-2
徒競走



図3-3
ビール早飲み

② 競走、パン食い競争

個人戦となる競技では1位から3位まで商品が出るため、みなさん手を抜かない。学生もおじいちゃん、おかあさんがたちに対抗して見事に商品を獲得することができた。

③ リレー

子供たちからお年寄りまで走る。徒競走、パンくい競争同様、全員が本気で走る。すごいところはおじいちゃんが転倒してもすぐに立ち上がりまた全力で走り出すことである。

神谷は元気だと感じた。学生は、ゴールテープを持つ係をしたが、ゴールテープをもったまま走り、アンカーをなかなかゴールさせないようにした。観客のみなさんから「良いぞ、良いぞー！」とたくさん喜んでいただけて良かった。

④ 昼食

運動会が終了すると全員で豚汁を食べるのも恒例行事である。兄会の方が大量に作ってくださり、大きな鍋の豚汁をみんなで分けあう。とても心温まる行事だと感じた。



図 3 - 4
運動会終了後豚汁をかこむ

■運動会の魅力

神谷の運動会には、多くの魅力を感じる。まず幅広い世代の方が集まるきっかけになっている。集まるだけでなく、全員が楽しめる競技が満載である。怪我をしないようにと、朝一番にみんなでラジオ体操をする。相手が学生であろうと若い人だろうと本気で立ち向かってくるお年寄りが居る。運動後にこれもまたみんなでおいしいものを食べる。神谷の皆さんは恒例行事となっておりあたりまえの行事と感じているかもしれないが、こういった行事があることでご近所付き合いができて、何かあったときに互いに助けられる環境ができているように思う。

またこの企画を行うにあたり、神谷の各団体が協力、知恵を出し合い行われている。お年寄りが多い地区ではあるが、お年寄りに任せっきりせず、若い人たちが協力的なところも心強い。

このような環境が自然とある理由として、飲コミュニケーションが行われているからだと感じる。神谷の集まりのほとんどの場では酒が出され、酒を飲みながらコミュニケーションを取る。運動会の後も反省会という名の飲み会が行われた。若い人、お年寄りが盃を交わしながら本音で話をする。お年寄りは知恵や歴史を教え、若い人は意見をいう。時には言い争いもあるが互いに認めあっており、最終的にはともに酔っ払い、にこやかに帰ってゆく。神谷の元気と絆の原点だと感じる。

神谷はここ 20 年ほどの間に団地ができて、子供を連れた家族が多くなった。最初の頃は行事や集まりごとがめんどくさいと感じていた人も今では行事の中心となって動いて

いる。めんどくさいという気持ちを上回るほどの魅力が神谷の飲コミュニケーションにはあるのだと思う。

■成果、来年以降

今年は学生3人での参加であったが、3人ともお年寄りに負けず本気で走り、本気でビールを飲み、本気で笑いを取りに行った。神谷の方にも喜んでいただけたと実感している。参加学生はただ声をかけられるのを待つのではなく、自ら出来ることはないか探し行動できた。そのため老若男女多くの方と会話が生まれ、顔と名前を覚えていただけた。

来年以降も是非参加したいし、参加学生が多ければ助っ人としてではなく、一つのチームとしての参加も可能となるため、より盛り上げることができると思う。当日だけの参加となったが、事前準備やミーティングに参加することで学生らしいアイデアを提案し、新しい神谷の魅力を増やすこともできるのではないだろうか。

(3) 神谷いかだ作り

昨年も神谷で多くの行事に参加して交流を深めてきたが、今年の活動は神谷の方々と一緒になって何かを作成したいという思いを持っていた。高橋先生から神谷で使用されていたいかだが古くなり、今回新たに作り直すという話を聞き、神谷の魅力作りの一環に繋がるものでもあるし、一緒になって作業を行ない、喜びを共に分かち合いたいという思いから神谷造船倶楽部の発泡スチロール製のいかだ作りに参加させていただいた。事前に行われたいかだ作りに関する打ち合わせには時間の都合上参加する事は出来なかったが、後日、当日作るいかだの設計図を高橋先生からいただいた。

その設計図を見て、いかだの大きさに驚きを感じたが、できあがり想像したら、作り甲斐があるなと感じた。

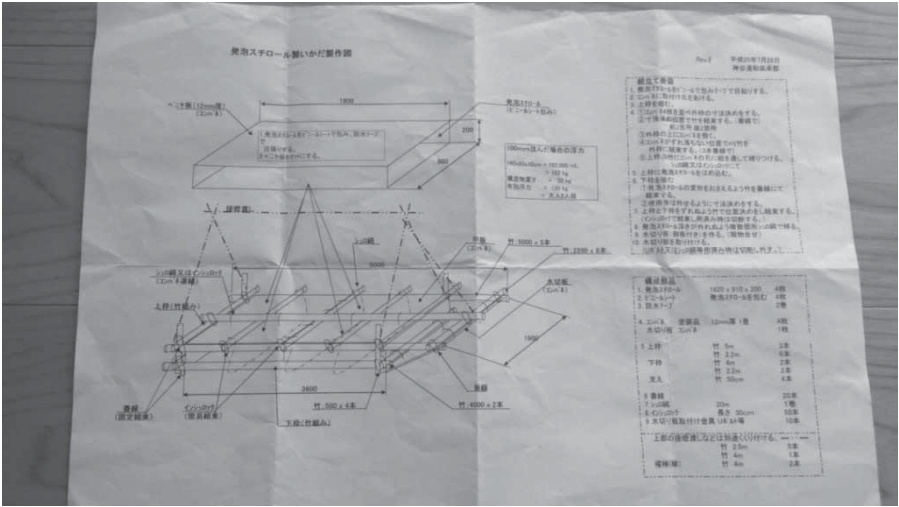


図 3-5
発泡スチロール製いかだづくり設計図

いかだ作りの作業は、7月28日の午前10時頃から開始された。いかだに使用する竹をもらいに行く作業や発泡スチロール、コンパネを運ぶ作業を最初に行った。その後、神谷の村中を流れる須川の傍らにある神谷中央公園の木陰で作業を行った。設計図に書かれている寸法通りに竹を切断する作業、発泡スチロールに防水処理加工をする為にビニールで包む作業、コンパネに穴を開ける作業が行われた。作業自体は、笑いを混じえながらもとても良い雰囲気の中で行うことが出来た。組立の準備を午前中の内に済ませて、本格的な組立は午後から実施する事になった。

午後の作業は、防水処理加工された発泡スチロールと穴を開けたコンパネを繋ぎ合わせることから始まった。その後、切断した竹をコンパネに結束バンドや番線で外れないようにしっかりと固定する作業を行ない、徐々にいかだ作りも完成に近づいた。最後にいかだの先頭部分に水切り板を取り付けていかだは完成した。

その後、試しに乗ってみようということになり、須川にいかだを運んで浮かべることにした。最初にゼミ生2名が乗せてもらうことになった。最初は、沈まないか、壊れないかという不安感があったが無事に浮いた。安全を確認した後、漕がせてもらい、発泡スチロール製いかだ作りの試乗も無事終えた。



図3-6
設計図を見ての作業



図3-7
ゼミ生による試し漕ぎ

成果・反省

いかだ作りに参加させてもらい、笑いも交えてとても楽しい雰囲気の中で作業を行うことができた。作業をする時、楽しく、でも真面目に真剣に作業に取り掛かる光景を見て、これも神谷ならではの特征なのだろうと感じた。今回作成したいかだが、今後も神谷で使い続けられたら良いなという思いが生まれた。作成作業に快く参加させてくださり、作業を一緒におこなってくださった神谷造船クラブのみなさんに対して、感謝の気持ちでいっぱいです。

(4) いかだ進水式

8月4日に神谷の方々、小学生、そして私たちゼミ生が参加して、発泡スチロール製いかだ進水式が行われた。この日の為に巨大なくす玉まで用意されていた。くす玉を開くと「祝 須川いかだ進水式」と書かれた垂れ幕が出てきた。区長さんのいかだ完成に関するお祝いの言葉の後、清酒でいかだを酒で清め、用意してあったシャンパンで乾杯をした。セレモニーの後は、小学生を乗せて須川を往復して、いかだ遊びを楽しんだ。細い竹の棒がオール代わりであった為に漕ぐのが大変で、コツを掴むことが難しかったが、慣れてくると楽しく感じる事ができた。



図3-8

「祝 須川いかだ進水式」と書かれたくす玉



図3-9

ゼミ生と小学生が遊ぶ光景

成果・反省

神谷の方々がゼミ生もいかだに乗りなと言って下さったにもかかわらず、なかなかいかだに乗りようとせず、神谷の方に対して失礼な態度をとってしまった。今後の活動において注意する点であり、反省すべき点である。

(5) 秋季大祭

8月25日、神谷神明社の秋季大祭に参加した。この秋季大祭は、2日間にわたって行われる神谷の伝統的な行事である。この行事は、神谷の伝統芸能を間近で見ることができることから、私たち高橋ゼミは去年も参加した。今年も、伝統芸能を学び、神谷の方々と交流を深め、また今後の活動の参考になると思い参加した。

去年はソーラン節を披露したが、練習不足で踊りが乱れたために神谷の方々の反応はあまりよくなく、良い結果を残せなかった。去年の反省を踏まえ、今年はもっと神谷に寄り添ったものをしようということで、神谷に伝わる「田植え」を披露することにした。

田植えという踊りは、手で苗を植えた時代の田植えを模した踊りである。この踊りをするために、私たちは神谷の伝統的な踊りを収録したDVDを借り、空いている時間や夏休

みを使って、ゼミ内の神谷出身の4年生に手取り足取り習い、猛特訓をした。途中難しい部分があつてうまく踊れなかったり、全体の動きが合わず、何度も同じところを繰り返し練習した。その甲斐があつて、最後の練習の時には今までで一番良いできとなった。

残念なことに体調不良などが原因で祭り当日の参加者は、4年生の4名のみとなつてしまった。だが祭りの会場には、子供と親御さんが一緒に参加するご家族や年配の方々が多く見受けられ、老若男女問わずたくさんの方々が見物と出演の両方を兼ねて来ておられた。祭りは、大きく分けると、初日の昼は、踊りと笛の演奏を行いながら地域を周る屋台引きがあり、夜には、飴屋や広大寺などの伝統芸能を中心にした演劇大会が行われる。翌日の午前中は、演芸カラオケ大会が行われ、午後からは、屋台が前日まだ廻っていない地区を巡り、神谷公民館に到着するまで続けられる。私たちが参加したのは、昼に行われた演芸カラオケ大会である。これは神谷を16に区分けした班から出し物を出し、その出来栄で順位を争うものである。この大会はとても白熱し、子供から大人まで終始歓声や笑い声が絶えない。そのなか私たちは区長さんからお褒めの言葉と「アツアツ賞」というものをいただいた。私たち高橋ゼミの出し物は去年より数段良くなったと言われ、もらった賞も去年より良いものであった。

この行事に参加して、私たちは相手のことを学び、でできる限りたくさんの人に興味を持ってもらえるような計画を立て、歩み寄ること、みんなでそれぞれが出来ることをして助け合うことで大きな評価を得ることが出来ることを学んだ。またこの活動で何より驚いたのは、子供を含めた参加者の多さである。こうした行事への参加率の高さは、他の地域ではそうそう見受けられるものではない。行事の魅力だけでなく、地元民の団結力や皆で共に神谷を盛り上げたいという気概が現れているのだと感じた。

それに比べて、私たちゼミ生のほうは、計画の段階でも集まりや参加が悪かったことや3年生の参加がなかったことことから、来年の高橋ゼミの活動に不安を感じた。



図3-10
ゼミ生による「田植え」披露



図3-11
アツアツ賞を区長さんからいただく

(6) 収穫祭

10月26日に神谷地区で開催された収穫祭に3年生2名が参加した。調理、テント張

り、看板作りなどを行った。また、区長さんから収穫祭の記録として、写真をたくさん撮ってもらいたいと頼まれ、写真の撮影も行った。撮り終えたたくさんの写真をご覧になって、区長さんは喜んでおられた。



図 3 - 1 2
収穫祭開催会場の看板

収穫祭は大賑わいで、子供たちも沢山集まり、とても楽しんでいる様子だった。行事の中では、餅つきに人気が集まった。実際に餅つきを体験することで嬉々とした表情をする子供たちが見受けられた。つきたての餅はとても弾力があり、美味しかった。餅以外にも具沢山の汁やおやつポップコーンが出された。

収穫祭が終盤に近づいたところで、神谷の方々によるパフォーマンスが行われた。写真は、子供たちが餅をついているところを写したものである。



図 3 - 1 3
餅つきの様子

4. 各班の活動報告

4-1 e コミ班

e コミュニティ班は、情報を外部に向けて発信するテーマをさらに発展させ、インターネットを利用した情報発信に取り組むことにした。

インターネットを使った情報発信は、多くの人に容易に情報伝達ができ、地域活性化に有効な手段の一つであると考え、e コミュニティ・プラットフォームを活用して神谷に関する情報やゼミナールの活動状況を発信する取り組みを行うことにした。

(1) e コミとは

e コミュニティ・プラットフォーム（略称e コミ）は、「災害リスク情報プラットフォームの研究開発」の一環として防災科学研究所が開発した参加型コミュニティ Web システムであり、地域社会を支える新たな統合的な情報基盤である。

以下のような多様な機能を持つ。

① CMS機能

自治体の公式ホームページや地域コミュニティサイトの構築、運用、管理に必要な多様な機能を提供している。各ページには、ブログや掲示板、スケジュール、アンケート、メンバーリングリスト等のパーツを自由に配置し利用することができる。

② SNS機能

地域SNSや非公開型のグループウェア、住民向けの個人ポータルサイトとして運用する個人ページやグループページを開設し、管理、運営する多様な機能を提供している。

③ Web-GIS機能

地理空間情報の共有および流通のための各種国際標準に準拠し、地理空間情報の動的かつ即時的な相互利用や、各種マップ作成・印刷機能を提供している。

④ GPS対応携帯電話等のモバイルによるアクセス利用への対応

市販のGPS機能付き携帯電話からの情報の登録・参照が容易にできるモバイル環境を実現しており、いつでもどこでも、誰もが容易に情報の受発信が可能。

⑤ 汎用Webブラウザのみによる利用環境の実現

上記をはじめとするシステムのすべての機能やサービスは、特別な専用ソフトをPCや携帯電話上にインストールすること無く、汎用Webブラウザのみで利用することができる。

従来の地域コミュニティを支援する参加型コミュニティWebシステムは、CMSやSNS、Web-GIS等が単体で構築され運用されていたが、それらを一つにまとめ閲覧しやすくまとめることができるのがeコミの特徴である。



図4-1に示すように、様々な機能的なパーツを自由に配置することができ、見やすく、解り易く情報発信ができる。掲示板やアンケートなど外部の方との情報交換が行えるパーツも多々あるので、外部の方との交流の場にもなりえる。

本来のe コミの想定利用者は、市町村等自治体 住民組織、市民活動団体、地区自治組織、NPO、コミュニティビジネス等、地域で活動する組織・団体、や自主防災組織等である。そのため、学生が、活動の一環として使用するのとは初めてである。

去年の活動候補であった地図の作製もe コミのマップ機能を利用することで作成できる。

以下、地域住民自らが参加型で地図を作成し、グループ内や外との情報共有が行えるWeb マッピングシステム（Web-GIS）について説明する。

① インターネットに接続されたPC から利用可能

e コミマップの利用の為に特別なソフトウェアは必要ない。インターネットに接続されていれば、あとは、ウェブページを閲覧するためのWeb ブラウザーがインストールされていれば利用できる。また、地図の操作は主にマウスのクリックでできるため、ワードやエクセル、インターネットを利用している人であれば、誰でも利用できる。

② 各種背景地図を下敷きに参加型で地図作成が可能

インターネットまたは携帯電話、スマートフォンからログインして、複数のユーザにより、参加型で地図を作成することができる。背景地図は、Open Street Map、電子国土Webシステム、Googleマップ、基盤地図情報等が利用できる。e コミマップのサイト内に複数のグループを設置し、それぞれが地図を作成し、互いに情報を引用し合うことが可能である。

③ オープンデータとして公開された外部公開地図をマッシュアップ可能

オープンデータとして公開された地理空間情報を公開・共有できる国際標準（WMS、KML等）に準拠している。このため、利用者は外部で公開された地図をマッシュアップ（複数の地図をまとめて一つの地図のように見せる）することができる。これにより、利用者が参加型で作成した登録情報と外部から取得した地図を重ね合わせることができる。

④ 携帯電話やスマートフォンからも利用可能

携帯電話やスマートフォンからも地図を閲覧することができる。さらに、GPS機能を使うことで地図上でどこにいるのかを知ることができる。さらに、携帯電話やスマートフォンから情報の登録や写真の投稿ができる。

⑤ 作成したマップの公開/非公開の設定が可能

外部に公開しないマップは、IDとパスワードにより制限することができる。また、グ

ループ内での利用やインターネットによる公開などの詳細な設定が可能であり、利用者の運用・利用方針にあわせた公開レベルの設定が行える。

⑥ 地図印刷機能

地図を使ったワークショップ等が可能なように、任意の範囲を指定した紙地図と同等のデザインの出力ができる。加えて、A4サイズで印刷した地図をタイル状につなぎあわせて、A0サイズにすることもできる。

⑦ 地図公開機能と外部システム連携のためのAPI

作成した地図は、国際標準の共有方式（WMS，WFS）に準拠した公開ができる。また、ブログ等に地図を埋め込んで表示できる。さらに、他の情報システムからAPIを使ってアクセスすることもできる。そのため、各種ウェブシステムとの連携することが容易である。

今年度は、ページの公開で手一杯であり、地域住民参加型のマップを作成するのは難しいと判断し、グーグルマップで代用した。今後は、神谷住民の方々と一緒になってより詳細な地図作りを目指す必要がある。

例えば、ある地点に関する記事と地図上の位置をリンクさせる地図機能も他機能と組み合わせることで、幅広く使うことができる。続いて、そのリンクを意味する地図上のアイコンをクリックすると、それに関連した記事を表示させることができる。したがって、この機能を使うと、何処でどんな行事が行われているのかを訪問者に伝えることができる。



図4-2

eコミュニティ・プラットフォームを利用した神谷のサイト

(2) 目的

一昨年のゼミ活動で、「神谷情報マップ」を作って神谷の人たちに配布したところ、今まで知らなかった神谷を知ることができたなどと非常に好評であった。しかし、もっと多くの神谷の情報を掲載し、随時新しい情報を紙で作成した「神谷情報マップ」に掲載することは、労力だけでなく、金銭的にも負担が大きい。

そこで、インターネットを利用した情報発信の仕組みを作ることにした。使用するシステムは、e コミを使うことにより、常に斬新な情報を容易に伝達できる電子版の神谷情報マップを作ることができるのではないかと考え、e コミを使った「越後長岡神谷情報のサイト」の作成を行うことにした。

(3) 活動内容

① コンセプト

e コミを見たとき、誰にでもわかり易く、楽しく閲覧していただくために以下のようなコンセプトを設けた。

- ・見やすく、わかり易く、外部の人に伝えたいことを伝える
- ・注目度のある記事、最新の記事を目に入りやすい位置に設置する
- ・要望があればすぐに改善する
- ・神谷の方々が納得し、自慢できるようなサイトを目指す

② 掲載情報

- ・神谷での行事の活動をまとめた記事の作成。(秋季大祭、ほうき作り、チューリップ植栽など)
- ・地図機能の導入(地図に建造物の位置と詳細を記載、歴史的建造物や神谷の歴史についての紹介)
- ・今後の予定をカレンダー機能に掲載。

(4) 成果と課題

① 成果

- ・最新の記事やカレンダーを目につき易い位置に設置し話題性を重視し、見やすくわかり易いトップページにした
- ・コメント機能で意見を取り入れやすくした

② 反省点

- ・文字だらけの更新になることが多かったので、行事やイベントの更新をする時は現地で写真を撮影し、画像として活用すべきであった。
- ・集まりが悪かった。集まりが必要な時はもっと早めに連絡し、全員の都合のつく日にす

るべきだった。

- ・知識が足りなく、進捗が遅かった。アドバイザーの方に相談することで解決し、知識の向上に繋がった。

③ 今後の課題

未だに試作段階なので、卒業までにさらにページを見やすく改良・更新して完成形として公開する。

また、ページは公開したばかりなのでe コミページをたくさんの方に知ってもらう必要がある。ツイッターで専用アカウントを作り定期的につぶやきを行ったり他のサイトにリンクの協力をお願いしたりしてサイトの広報活動を積極的に行う。記事の作成のためにも今後は、神谷の方との交流の機会を増やすとともにページについての意見をいただき反映させていく予定である。

(6) 活動から学んだこと

冊子を制作を通して学んだことは、神谷地区の魅力は今まで学んできた以上に深く、また神谷の方々から学べることを多いという事実である。特に私たち4年生は昨年度に引き続き神谷での活動を行ってきており、昨年度も多くのことが学べた。ですが、今年度も引き続き神谷の方々と交流を持つことで昨年度は見えなかった新たな魅力が見えてくることもあった。特に秋季大祭やどろんこ田などでは見学するだけではなく、実際に参加することで長岡大学生ではなく神谷の方々の一員として神谷を見ることができたのではないと思う。また、この度の冊子作りについても昨年度の活動を通じて見つけた神谷の魅力以外にどんなことを内容に載せれば良いかという点で悩んだことがあったが、そのような不安はなかった。神谷という土地の魅力は1年程度調べたくらいでは調べ尽きることはなく、それどころか今年度の活動を通じてより多くの新しい魅力を見つけることができた。そしていつかこの魅力を高橋ゼミナールの活動を通じてより多くの人に伝えてゆきたいと思う。

4-2 チューリップ植栽班

(1) 新潟県チューリップ初開花の地

私たちが神谷でチューリップの植栽活動をしている理由は、神谷が『新潟県チューリップ初開花の地』であるからである。しかし、神谷の方々はもとより県内の多くの人が、この事実をほとんど知らない。そこで、神谷の魅力を引き出し伝える活動の一環として、私たちの手で実際にチューリップを植えることで、神谷の魅力の一つとして多くの人に知らせるという思いから活動した。

(2) 今年の開花

植栽活動は、昨年から行っている。昨年11月に植えた約1000個の球根は、花壇に

植えた球根の一部が芽を出さなかったものの、プランターに植えたものも含めて春にはきれいに開花し、神谷遊園地を鮮やかに彩った。



図 4－3

神谷運動公園に咲く昨年植栽したチューリップ

（３）今年の植栽活動の流れ

① 球根収穫、保存

５月の初めには、花を切り落とし、球根の育成に努めた。６月には、育成した球根を掘り出し、次期の植栽に向けて、乾燥させ、秋まで保存した。

掘り出した球根は、小さいものも含め約２０００個ほどであった。

② 参加呼びかけ回覧板

１０月に入って、植栽活動を再開した。神谷にチューリップを植えるのだから、今年こそは、ぜひ神谷の皆さんと一緒に植栽活動を行いたいと考え、地区の回覧板で植栽活動への参加を呼びかけた。しかし、直前の協力依頼、また平日の昼間の依頼だったのと、あいにくの雨だったために参加してくれる方はおられなかった。この広報の仕方だけで不十分なことがかった。

③ 花壇づくり

昨年作った花壇が崩れてしまっており、作り直す必要があった。公園内のチューリップの隣には、ベコニアが３０メートルほどにわたり植えられているため、グラデーションと花の時期を考え、さらに子供たちが公園で遊ぶ際に邪魔にならない位置に作ることにした。形も、崩れにくい形にすることにした。

その結果、作り直した花壇は、ベコニアの花壇から一步内側に入ったところに幅約１ｍ、長さ約１０ｍの長方形とし、さらに、雨が降っても土が流れ出さないように周囲をブロッ

クで囲むことにした。

作成手順

- ① 昨年使っていた花壇のブロックを解体
- ② おおよその場所に土を盛る
- ③ ブロック同士に隙間ができないようにつなげていく
- ④ ブロックが倒れないように釘を刺して固定させる
- ⑤ 土を追加しながら全体に広げる
- ⑥ 肥料をたす
- ⑦ 耕運機で耕す

プランター26個は、たまっていた水を抜き、ミニスコップを使ってひとつひとつかきまぜ、肥料を追加した。



図4-4

今年の作成したチューリップ花壇

花壇を作り直すために発生した経費は、以下のとおりであった。

① 壊れていたプランターの補充（4個）	692円
② プランター用肥料（14L）	796円
③ 花壇用肥料（40L）	2394円
④ コンクリートブロック（10個）	1180円

④ 球根の選抜

春に収穫した球根の数は昨年の2倍以上になっていたので、よりしっかりした球根を優先的に植えようと考えた。

球根を増やすことを分球と言う。球根は増えたり芽の数が多くなった状態で放っておくと、窮屈なイモ洗い状態になり、十分育たなくなる。そうなる前に分球して十分スペースを確保してあげることが大切である。球根にはいくつかの種類があり、チューリップは鱗茎（りんけい）とよばれ、短縮した茎に肥大した葉っぱや葉の一部(鱗片葉)が重なり合って球状になる。タマネギを例にするなら、「タマネギの芯」と呼ぶ部分が短縮した茎で、ペリペリ剥がれる一枚ずつが鱗片葉。さらに鱗片葉が層状になった「層状鱗茎」と、うろこ状に重なりあった「鱗状鱗茎」がある。小さい球根は植えても葉が1枚だけ出て花が咲かない場合があるため、今回は大きいものから優先的に植えることにした。

⑤ 植栽当日

11月半ば、あいにくの雨天だったため神谷の方の参加はなく、ゼミ生だけで神谷遊園地に植えた。昨年、深植えのために芽の出なかった球根があったことから、深植えにならないように気をつけながら植えた。

手作り花壇とプランターに約1000個超を植え、プランターは防災庫の下へと運んだ。冬を越え春には神友館の前や運動公園沿いに並べる予定である。



図4-5

ゼミ生全員による球根植栽



図4-6

プランターへの球根植栽

（4）継続システムの重要性、

私たちがチューリップ植栽活動を始めて2年になるが、今後のことを見据えると、神谷の人たちによる植栽活動のシステムの構築が必要だと考える。というのも、高橋ゼミがずっと存在し続けることはないからである。では高橋ゼミがなくなるとともにチューリップ植栽活動を終わらせてしまっても良いのかというと、そうはしたくない。せっかく神谷は新潟県チューリップ初開花の地であることが分かり、神谷の人々に認知されつつあるなか、歴史的事実が風化し、再び忘れ去られてゆくことは、もったいないと考える。

では、神谷のチューリップ植栽活動がこの先も続いていくためにはどうすれば良いかを考えた。その結果、神谷の人達自身が植栽活動を行う必要があると考えた。正直なところ

まだなぜチューリップを植えているのか、なぜほかの花ではなくチューリップなのかと疑問を持っている住民の方も多いと思う。例えば、運動会や収穫祭のように今では神谷の中に定着している行事もはじめはなにもないところからのスタートだったと思う。このことを重ね合わせて考えると、私たちがスタートのシステムを作ることができれば植栽活動の継続は可能ではないかと考えた。

まず誰にお願いをするのか。ここが大きなポイントとなる。「誰かやってください。」では、だれもやらずに終わってしまう。昨年も今年も、球根を植える際に呼びかけをしたが一人も来てもらえなかった。神谷の人たちが参加した植栽活動にするには、様々な場面で活動している人たちに呼び掛け、その人たちを核にして取り組んでゆくのも一つの方法である。しかしひとりでは心細く、何からしたらいいかわからないと思う。そこで、神谷に多くある団体に声かけをするのが良いのではないかと考える。神谷には兄会、神盛会、福寿会、芸能保存会、子供会などたくさんの団体が存在している。そういった既存団体に声をかけ、一緒に植栽活動をすることから始めるのが良いのではないかと考える。どの団体に声かけするにせよ、チューリップを植えなければいけないと思ってやる活動は続かないと思う。皆さんがやりたい、楽しい、これが神谷の魅力だ、「新潟県チューリップ初開花の地」という誇りが感じられるような活動にすることが重用である。

（５）成果・反省

２年間のチューリップ植栽活動を通して、はじめはチューリップの植え方、歴史をなにも知らない状態から始めた。わからないことを自分たちで調べ、時にはヒアリングをしてやっと植栽活動として成立しつつあるように感じる。チューリップが咲いた際には、神谷の方にきれいだったと声をかけて頂けた。神谷の皆さんの間で話題になればいいと思う。

しかし来年以降のシステムの構築については、構築までのプランを今年の活動でもっと具体化すべきだった。また２年間の活動では、費用をすべて神谷から工面していただいた。今後“チューリップ植栽の会”等が成立すればよいのだが、いつまでたっても神谷の予備費からまかなってもらえるような活動は続けるべきではないと思う。費用や作業を自分たちで工面し、保管できるようにするなど、自立した植栽活動が行えるようにする必要がある。

（６）来年以降へ向けて

継続システムの構築は１年２年ではできないことだと感じる。神谷の住民の人達の間はまだ何もその機運は、盛り上がっていない。問題点を解決しながら今後も活動をしていく必要がある。また団体として成立するためには、少なからず神谷の多くの方の協力が必要となる。呼びかけ、実施の先駆者として今後も活動を続けたい。

4-3 Eボート班の活動

4-3-1 活動概要

高橋ゼミナール3年生は、今年度の活動として神谷地区を流れる須川でEボートを使った川下りの実施に向け取り組んできた。

神谷を流れる須川では昔、子供たちは水遊びや魚釣りを楽しみ、大人たちは洗濯や野菜洗いをし、さらに古くは船で米などの荷物を運ぶなど、須川は神谷の人たちにとって大切な生活の場であった。そんな神谷と須川のつながりの歴史を振り返るとともに、もっと須川と親しもうということ、7年前から自作のいかだを使った川遊びが行われていた。

しかし、そのいかだが壊れてしまったということを知り、神谷地区の小学生を対象にEボートを使用した須川の川下りを計画することにした。普段須川と触れ合うことのない子供たちにEボートを使った川遊びの体験を通して、これまで気づかなかった神谷を見つけてもらうとともに、須川の歴史に触れてほしいと考えた。

4-3-2 Eボートについて

(1) Eボートとは

Eボートは、全長650cm、幅140cm、重量約60kg、空気を入れて浮かせる十人乗りのゴム製カヌーである。空気を抜けば、縦約100cm、横約60cmとコンパクトになり、運搬も手軽に行うことができる。さらに、環境教育を目的とした活用や水害や事故などの緊急時対応を身につけるために使用されている。しっかりと危機管理をマスターした指導者がいれば、川などの水辺と親しむツールとして最適であることが分かった。



図4-7

須川川下りで使用を考えているEボート

(2) なぜEボートなのか

Eボートは安全性が高いうえに操作が簡単で、初心者でも気軽に参加することができる。そのうえ、長岡市役所越路支所（以後、越路支所と略す）に保管されていることから手軽に利用できるのではないかと考えたからである。また、大人数で連携して楽しむことがで

きて、災害時にも使用されることから、防災意識の向上にも役立つと考えた。

4-3-3 Eボートを使用した川下り計画

(1) 準備

川下りを行う予定である神谷地区の須川の下見を行った。その結果、川下りの距離は約700m、所要時間は約30分と設定した。また、発着岸場所については、子供たちの安全性を考慮しながら場所の選定を行った。



図4-8

3年生の須川調査の様子

(2) 実施計画

神谷地区の小学生に川下りに参加してもらうにはどうしたらよいかを考えた結果、小学生が夏休みに入ってからの方が参加しやすいのではないかととなり、実施日時は8月上旬とした。川下りに興味を持ってもらうために、チラシには、Eボートを実際に行っている写真を大きく載せる、分かりやすい文章で説明をする、などの工夫をすることを考えた。また、地域の方の協力を得たり、保護者からも子供たちに参加を呼び掛けてもらう等、たくさんの人から参加してもらうためにもチラシを作成し、回覧板で全戸に配布することを考えた。

(3) 挫折

Eボートを越路支所から借りることと指導者の確保をどうするかについては、学生の我々だけの力では難しいので、神谷地区の区長さんのお力を借りて、区長さんから越路支所に話しをしていただくことにした。

しかし、「国土交通省から須川の使用許可が下りていない」、「目的が曖昧である」、「安全面に不安がある」という理由で、Eボートの借用許可を得ることが出来なかった。指導者についても、支所にEボートを指導できる人はいないことが分かった。これらのことから、実施予定としていた8月上旬までに川下りを行うことは難しいと考え、2014年夏の実施に向けて計画を練り直すことにした。

4－3－4 川下り実現に向けて

(1) 上川西小学校 金子明子教頭先生へのヒアリング

長岡市の上川西小学校の6年生が、信濃川にてEボートを使用した川下りを行ったことを新聞で知り、どのようにしてEボートの計画を実現させたのかを知るために、上川西小学校の金子明子教頭先生にヒアリングを行った。



図4－9

上川西小学校での金子明子教頭先生へのヒアリング

以下に、ヒアリングでの質問事項とそれに対する金子先生のお話をまとめた。

① なぜEボートで川下りをしようと考えたのか。

地域を故郷として感じる事ができて、みんなでやるような行事は何かと考えたとき、信濃川でEボートを使って、川下りをする事で、故郷と子供たちをつなげたいと思って企画をされた。

② この計画を実施するためにどのような協力体制を作られたのか。

教員だけではEボートを実行することができず、後援会長、PTA会長などとともに川下り実行委員会を作り、見込を立てて実行委員会が市に川下りの提案をした。地域の方や保護者にも安全面などの説明をして協力者を募集した。さらにコミュニティセンターでも声をかけてもらった。

③ 川下りの実施までにどのような準備をされたのか。

アオーレ長岡の高橋さんから、Eボートのコーディネーターである山下さんを紹介してもらった。指導者の方は東京から招き、Eボートは長岡市から3艇、三島と越路から1艇

ずつ計5艇借りた。カヌー協会からも、ライフジャケットとポンプを借りた。事前に川下り実行委員会で乗り方の指導や片づけも含め練習を行った。

Eボートのコーディネーターの山下さんや指導者を招くには費用がかかり、補助金だけでなく、参加者から一人1500円の参加費を徴収した。

④ 安全のために配慮された点は何か。

水難事故の防止やEボートの操作を指導者から、何回かに分けて教えてもらった。Eボートに乗るためには、素早い判断力と緊張感が必要であった。ボートの上は暑いため水分補給の水と、引上げ用のロープも用意し、引き上げの人にもライフジャケットを着用してもらった。また、信濃川の危険な地点と着岸地点の安全性を確認した。指導者の言うことを聞けない人は乗せなかった。

⑤ 新聞によると「プールで子供たちがEボートやライフジャケットを体験した」ということだが、指示されて行われたのか、それとも自主的に行われたのか。

Eボートの貸し出しには、指導者の確保と安全指導は必要で、子供たちの安全確保は重要だった。事前の安全指導として、プールでEボートやライフジャケットを体験し浮く練習をするなど、救助の練習をしながら水に慣れ親しむことを行った。

⑥ どのような手続きを踏んでEボートを借りられたか。

指導者の確保が絶対条件だったのだが、長岡市には居なかったため東京から招いた。企画書をまとめ、河川事務所を訪問し、Eボートを使用した川下りを信濃川で行う許可をもらえるように話し合いを行った。その際、Eボートをやる上での全ての質問に答えられるように準備した。

⑦ 計画を保護者に発表した際に、どのような反応があったか。

最初に伝えた時は驚かれた。そこでPTAの方々に、安全面などを説明し理解を得て、地域の方々とも協力することができた。

⑧ 計画を実施した後の保護者の方や子供たちの感想はどうだったか。

「川底を見ることができた」「またやりたい」「川下りをしてみても発見するものがあった」などの感想をいただいた。スタートが越路橋からで、距離約6.8km、所要時間約40分と長距離かつ長時間の川下りだったが、川に流れがあったため子供たちに疲れは見えず、川下りに怖がることもなく楽しんでいた。

(2) 課題

ヒアリングを行った結果、次に示す課題が明らかになった。

- ① 私達にEボートの経験がない。
- ② 指導者と協力者を見つける。
- ③ 安全対策が不十分だった。
- ④ 活動資金に工面。
- ⑤ 河川の使用許可とEボートの借用許可を得る。

(3) 長岡市民協働センター 高橋さんへのヒアリング

上川西小学校のヒアリングで協力者として名前が挙がった長岡市民協働センターの高橋さんからもお話を伺いたいと考え、ヒアリングを行った。

以下に、ヒアリングでの質問事項とそれに対する高橋さんのお話をまとめた。

① 河川とEボートの借用許可はどのようにして得ればよいか。

安全性を保障し、反対意見が無いようにする。地域との協力体制を築く。自分たちがEボートを体験する機会を設ける。Eボートのコーディネーターである山下さんと話し合う。

② 指導者について。

Eボートを行うには指導者が必ず必要。1艇につき二人必要である。長岡市には指導者がいないため、他から招くことになる。(見附市、南魚沼、東京都など)

③ 自分達で指導者の資格を取得するとしたらどのような方法があり、費用はどれくらいかかるのか。

Eボートインストラクターになるための講座を受ける。インストラクターになると、Eボートをレンタルすることが出来て、人を乗せてクルーズすることが可能となる。この講座はステップ2までなら見附市で受講が出来て、地域交流センターでも行われている。

④ Eボートのイベント参加についてと、イベント情報を得るには。

Eボートのイベントは、新潟県では寺泊で行われており、2月には国営越後丘陵公園で雪上Eボートが開催される。また、群馬では6、7月に開催されている。イベント情報については、Eボートに関するHPを見る。

⑤ 資金の工面について。

市からの援助、大学の補助金、参加費の徴収などが考えられる。

⑥ 安全対策策が不十分と指摘され、ライフジャケットを着用しようと考えているが、他に留意する点はあるか。

特になし。

- ⑦ 須川をボートで何度か往復する計画だが、川下から川上にボートを運ぶときはどのように運ぶのがベストか。

Eボートの空気を抜き、折り畳み、軽トラックで川上に運搬する。

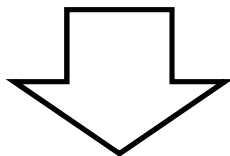
- ⑧ 川下り本番の前に一度須川にEボートを浮かべてみようと考えているが、その時にも指導者は必要か。

練習でも指導者は必要である。安全性を確認するためにも、試乗は行った方が良い。

(4) 課題

上川西小学校の金子教頭先生と市民協働センターの高橋氏へのヒアリングから、以下の課題が明らかになった。

- ① 安全性
 - ② アドバイザー
 - ③ 地域との協力体制
 - ④ 指導者
 - ⑤ イベント参加
 - ⑥ 資金



- ① Eボートのイベントに参加して私達が事前に訓練をする。また、ライフジャケットを必ず確保する。
 - ② Eボートコーディネーターの山下さん、市役所と相談をする。
 - ③ 行事に参加するなどして神谷の人々と交流する。
 - ④ 山下さんから紹介していただくか、自分たちで探す。
 - ⑤ 訓練の一環として、事前に我々がEボートを体験する必要がある。
 - ⑥ 市からの援助か、大学の補助金を得られないか検討する。出来るだけで参加費は取らない。

4-3-5 E ボート班のまとめ

(1) 反省点

集まりが悪かったために話し合いが進まず、取組に対する考えも甘かった。また、初めての取り組みだったために進め方が分からなかったり、活動の役割分担も決めることができなかった。E ボートを借りることを優先して、取組を進めた方が良かった等が挙げられる。

(2) 成果

- ① E ボートを借りる段階で挫折し、失敗を経験した。
- ② 失敗から改善策を考える力が身に付いた。
- ③ 成果発表会では、時間内にまとめられた。
- ④ ヒアリングをすることによって、話し合いの場を設ける事が出来て、様々な情報を得ることができた。

(6) 今後の活動

- ①補助金の詳しい話を聞く。
- ②E ボートのイベントがいつあるか、情報を調べる。
- ③神谷の人々と交流を深め、協力をお願いする。
- ④コーディネーターの山下さんをお呼びして、E ボートの計画について相談する。

来年度の E ボートイベント実施に向け、これらの項目を具体的なスケジュールにまとめて、計画的に活動していく。

5. まとめ

5-1 活動を通しての成果・結果

私たちは、昨年、今年と神谷に多く足を運び、いろいろな行事に参加させていただいた。参加回数が増えるたびに神谷の方に顔を覚えていただき、名前を覚えていただいた。就職活動はうまくいっているのかと心配して、俺の会社で雇ってやると言ってくれる方、卒業しても神谷に遊びに来いと言ってくれる方、飲みに行こうと誘ってくれる方など、多くの人から親しくしてくださった。私たちの2年間の活動は、このように神谷の方と家族のような関係を築くことが出来たことが第一の大きな成果だと感じている。

またゼミ活動をするうえで3年生の頃の私たちは人任せで、自分たちで物事を考えず言われたことだけをやるだけだったため、活動に活気がなく殺伐としていた。しかし、4年生になって、神谷の魅力をもっと引き出したい、いつもお世話になっている神谷の方になにか出来ることはないかと考え、自分たちで行動するようになった。全員が自ら考え行動することにより、情報交換が自然と取れ、各々の役割を全うできるようになった。会話も

なかった3年次春に比べ今では全員で仲良く活動できるようになった。

みんなで何かに取り組むことで1人ではできなかったe コミ、チューリップ植えなどを分担、協力して活動することができて、その後みんなで協力することの大切さを再確認し、その後の活動も取り組めた。

神谷には、誇れるものがたくさんあるが、それを他の地域の人に知らせるということとはなかなか難しく、神谷の外部への情報発信の活動はまだ始まったばかりの段階である。しかし、1人でも多くの方に神谷を知ってもらえるようなアイディアを出し合ったり、インターネットを使った地域の情報発信サイトを作り工夫をこらしたり、いろいろな思考の実現化に取り組み、活動できたことで社会に出たときに使えそうな柔軟な発想を得られた。

今まで、このようなプロジェクトに参加したことがなかったので、最初の段階で計画をたててアドバイザーの方、現地の方に相談し練り直し、失敗したらなぜ失敗したかを考え、成功者の話を聞くことで見えなかった課題を見つけ、改善を繰り返し行うことで1つのプロジェクトを進めていくことができるようになった。それにより、皆が納得のいく活動が行われ、達成感も得られることを学んだ。計画をたてて実行し、見直し、改善をしていくことが日頃から身についた。

何度も活動計画を作り直したり、何度も神谷の方と話し合いの場を設ける（去年）ことでへこたれない精神力、強い意志、心を持って活動に取り組むことができて、情熱を持って物事に挑むことができた。何事にも強い意志を持ち、自分が関わるものに情熱を注ぐ大切さ学ぶことができた。

最後になるが、地域活性化プログラムを通して目標としていた①社会人基礎力向上②ビジネス展開能力③専門的技法に関するスキルの向上については、みんなで考え行動できたことを考えると社会人基礎力は向上したと言える。また、自分たちで考えた企画を実行したことは、ビジネス展開能力の向上につながったと考える。

5-2 反省と改善すべき課題

2年間で得られた成果があるとともに、反省点もたくさんある。この2年間の活動を通じての反省点は次の通りである。

- ・世代によって交流が出来た方と出来なかった方のバラつきがあった。
- ・最初に立てた計画が甘かったこと。
- ・結果に対する確認が取れなかったこと。
- ・行事などの参加にバラつきがあったこと。

1つ目は、特に4年時からであるが、行事に参加させていただいた際、3年時の時に作った人間関係との交流がほとんどとなり、より多くの方との交流が出来なかったことが挙げられる。特により年配の方々との交流は、ジェネレーションギャップも大きく、なかなかうまくとることができなかったように思う。

2つ目は、2年間の活動を通してうまくゆかなかったことである。最初に決めた予定が

全くうまくいかず、作業が後手後手になってしまったり、神谷の人などにアポイントメントを取るのが予定ギリギリとなり、先方に多大なるご迷惑をかけることがしばしばあった。

活動に関係する人が多くなれば多くなるほど、打ち合わせをするにも、準備をするにも、時間がかかることを認識しておく必要があった。開催日を踏まえ、逆算をしながら日程調整・準備をするべきであった。

3つ目は、活動の最大のテーマである「地域活性化」がどれだけ進んだか、あるいは、神谷に住む方々が、少しでも自分の住んでいる地域が変わったと感ずることができたかという意識調査を行わなかったことである。これは24年度の間接発表でも指摘されたことであるが、私たちの自己満足で終わってしまっているのではないか、あるいは私たちの活動を支持してくれている方がおられるのか等を、はっきり調査すべきであった。この調査活動は、非常に大切なことなので、是非、来年度の活動の中に盛り込んでほしい。

4つ目は、行事への参加のような学外での活動に関してである。4年生の場合、就職活動が忙しい年であるため、全員揃うことが難しいことは理解できるが、正直残念であった。他方、今年度は、3年生の参加率もこれまでに比べて特に低かった。神谷にたくさん出向き、顔を合わせる事が大切な活動をしているにもかかわらず行事への出席が非常に悪く、そのことで、来年の活動の際に神谷の方から協力していただけないのではないかという一抹の不安がある。

さらに、行事に参加した人と参加しなかった人では、それぞれが持っている情報に差がでてしまい、ゼミ内でスムーズな話し合いが行えなくなるのではないかという心配もある。

5-3 神谷から私たちが学んだこと

神谷の伝統と共に引き継がれてきた飲コミュニケーションを実際に体験することで、年配の方や話をしたことがなかった人と話をすることができた。神谷の方が突然やってきた私たち学生を受け入れてくださることにより、年が違ふ人、初対面の人との関係の築き方を学ぶことができた。また、年が離れていても本音で気持ちをぶつけあい、互いが納得するまで話をする姿を見て、意見を人に伝える、人の話を最後までしっかり聞くことの大切さを教わった。神谷という地だったからできたことであり、神谷の小さい子供たちからお年寄りの方々まで幅広い年代の皆さんと交流をしながら活動できたことは誇りである。

謝 辞

私たちが活動をするうえで、多くの方たちから助けていただきました。感謝申し上げます。

特に、神谷区長の白井湛様、神谷創作趣味の会永井久一さまをはじめとする神谷の皆様、長岡生活情報ねっとの桑原真一様、長岡市立上川西小学校の金子明子先生、長岡市民協働センターの高橋秀一様には、大変お世話になりました。

神谷区長の白井湛様

お忙しい中、たくさんの時間を作り、丁寧に対応をしてくださり、また、たくさんアドバイスをしてくださりありがとうございました。

神谷の皆様

私たちは神谷という土地の豊かさを知り、人の温かさに触れ、人として大きく成長することができました。神谷の皆様とご縁があったことを本当に嬉しく、誇りに思います。私たちの活動に賛同、協力くださりありがとうございました。卒業しても大好きな神谷に遊びに行かせてください。

長岡生活情報交流ねっと 桑原真一様

何も分からない私たちにコミュニティサイトの作り方、基本的な操作方法を教えてくださいありがとうございました。桑原様のおかげでEコミを作ることができました。今後、ブラッシュアップしていけるようシステムの構築、継続的な更新をしていきます。

長岡市立上川西小学校 金子明子先生

Eボート計画のヒアリングでは、大変お世話になりました。先生の、一つ一つ課題を解決しながら、信濃川の川下りを実現されたお話は、私たちにたくさんの希望を与えてくれました。来年のEボート実行に向けて頑張りますので、今後ともご指導お願いいたします。

長岡市民協働センター 高橋秀一様

Eボート計画のヒアリングと長岡市立上川西小学校の信濃川の川下りに関する貴重な資料をご提供くださり、誠にありがとうございました。

来年こそ、是非とも神谷の須川でのEボート川下りを実現するよう取り組んでゆきますので、今後ともご指導をお願いいたします。

引用・参考文献

- ・ 学生による地域活性化プログラム平成24年度活動報告書
- ・ E ボート公式サイト
<http://jrec.co.jp/eboat/tool/>
- ・ 越後長岡神谷のサイトーe コミュニティ・プラットフォーム2. 0
<http://ngok-u.net/group.php?gid=10011>
- ・ e コミュニティ・プラットフォーム 公式サイト
<http://ecom-plat.jp/>
- ・ チューリップの育て方
<http://www48.tok2.com/home/bulb/Tulipa/tulipa-ikusei.htm>

